



教育宮崎市

※ 令和6年度より、電子版のみでの発行となります



春号の表紙は
本市の教育長、教育委員、教育局長です



CONTENTS

- 01 就任挨拶
- 02 教育委員会の紹介
- 03 市内の学校紹介
- 04 教育委員コラム



宮崎中の生徒による
一ッ葉の入り江での清掃活動



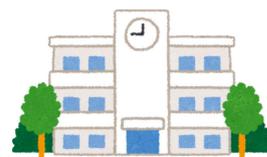
生日台西小と生日台東小の
交流の様子

教育長 黒木 貴 くらき たかし (表紙写真 左から3番目)

令和6年4月から教育長に就任しました黒木です。

就任して以来、多くのあいさつ等でお伝えしているキーワードが「地域があって、子どもがいて、初めて学校がある」です。この順番を間違えないようにしてほしいと話しています。学校が、「子どもにとって、地域にとって魅力的な場になっているか?」ということが問われていると感じます。

多くの友達や大人と出会い、知らないことを学ぶ、できないことができるようになる…学校という場が本来持っている魅力を多くの子ども達が実感できるよう、働き方改革をはじめ教育行政が取り組むべき様々な施策に全力で取り組んでまいります。どうぞよろしく申し上げます。



教育局長 森屋 重吾 もりや じゅうご (表紙写真 右から1番目)

令和6年4月から教育局長に就任しました森屋です。

宮崎市役所に入庁して33年が経過しましたが、教育委員会への異動は初めてです。異動内示の際には若干不安にもなりましたが、私自身も公立の小中学校で学び、また二人の子どもも宮崎市内の小中学校で成長してきたことを思い返しながら、日々の仕事に励んでいます。

就任してすぐに住吉中学校と加納小学校の入学式に参加させていただきました。今年の入学式はコロナ禍を乗り越え、久しぶりの全員参加型で挙行され、新入学という晴れ舞台と相まって感動的なものでした。

今、学校現場は様々な変化に直面し、これまでの考え方では通用しない場面が増えていると感じます。そのような中で未来を担う子ども達の育成という素晴らしい仕事に巡り合えたことを感謝しながら、精一杯努力してまいります。皆様どうぞよろしく願いいたします。

教育委員会 とは ?

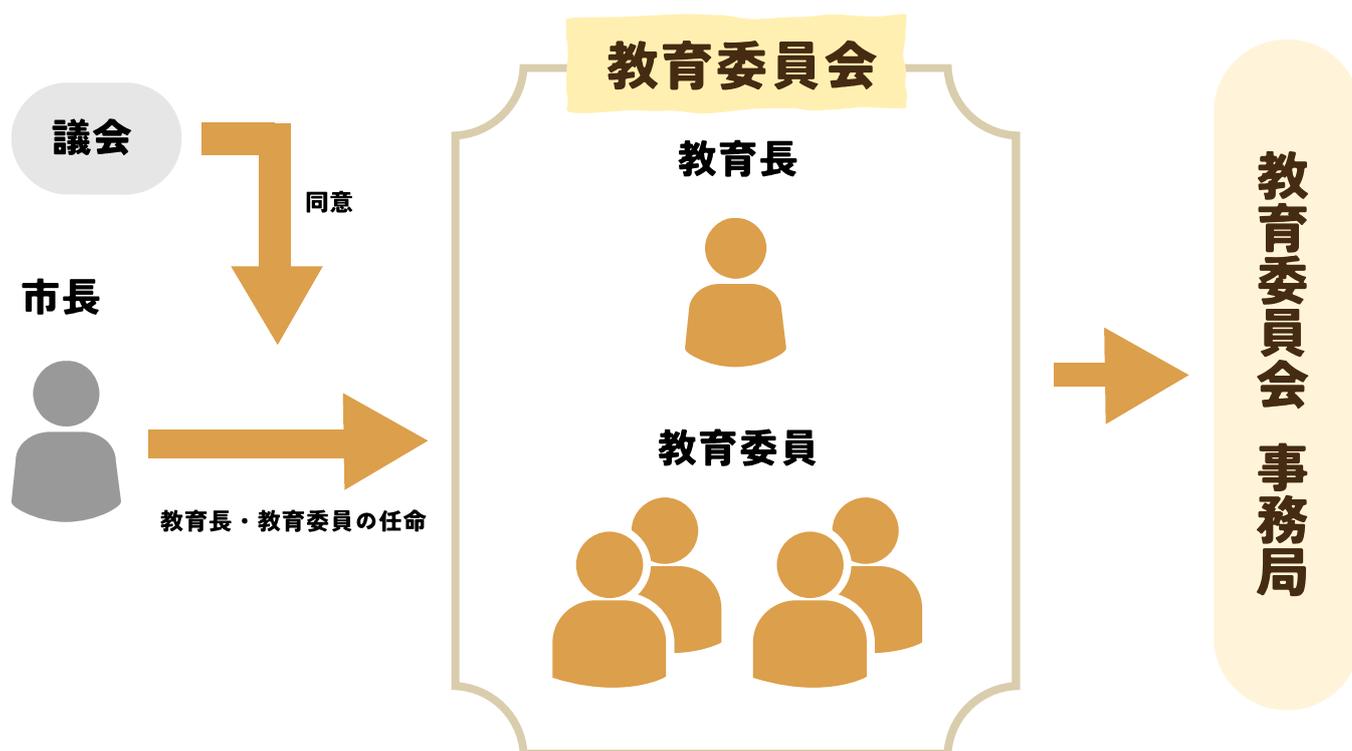
全ての都道府県・市区町村に置かれ、教育長と複数の教育委員で構成されている組織です。

教育委員は、教育、学術及び文化に関し識見を持つ人の中から地方公共団体の長が議会の同意を得て任命します。

宮崎市教育委員会は、教育長と4名の教育委員で構成されています。

教育についての基本方針や重要事項の決定、学校の設置や人事、校舎の整備、学校で使用する教科書選びなど、教育に関する大切なことは、教育委員会の会議で審議し採決（合議制）します。

ほかにも、図書館の設置や文化財の保存・活用なども教育委員会の仕事です。





生目台西小学校

生目台西小学校
ホームページ▶



思い出あふれる 1年に

生目台西小学校は、本年度創立31年目を迎えます。

「あい（合い）にあふれる学校」を目指し、児童も職員も日々活動しています。そんな生目台西小学校ですが、本年度末で閉校し生目台東小学校と統合することになりました。統合に向け、昨年度から生目台東小学校との交流学习を行っています。本年度も一緒に授業をしたり給食を食べたりする予定です。

生目台西小学校の児童や職員は、統合に向け、準備を進めるとともに、生目台西小学校での素敵な思い出をたくさん残すことができるよう、保護者や地域の皆様の協力を得て、日々を大切に過ごしています。

交流学习の様子です！

宮崎中学校

宮崎中学校
ホームページ▶



よりよい宮中築城計画～城下町の繁栄～

宮崎中学校は、本年度全校生徒450名と56名の教職員でスタートいたしました。

本校では「礼を正す 場を清める 時を守る」の校訓のもと、「1分前着席・チャイム黙想」「黙々無言清掃」「挨拶運動」に取り組んでいます。また、生徒会スローガンを「よりよい宮中築城計画」として、3年目を迎えました。

3年目の今年は、城下町の繁栄として「地域貢献」を念頭においた活動にも積極的、主体的に取り組み、全国・県内に誇れる宮中城を生徒・職員一丸となって築き上げてまいります。ご支援、ご協力の程どうぞよろしくお願いいたします。

一ツ葉の入り江で清掃活動を行いました



一人一人の子どもと社会のウェルビーイングのために



代表教育委員
松尾和彦

明治5年（1872年）に公教育の原点である「学制」が発布され、約150年が経過しました。今、学校教育が大きく変わろうとしています。

一つは、「学びの構造転換」です。

「みんなで同じことを、同じペースで、同じやり方で勉強する」教師主導のスタイルから、「子ども一人ひとりが、自分の都合とタイミングでいろいろな学習材にアクセスして学ぶような」子ども主体の学びへの転換です。

二つは、学校の校則の見直し等を含め、子どもたちが学校づくりの主役であることが、改めて認識され始めています。

三つは、「多様性」を取り入れた取組です。自分と異なる考え方の人も、対話を重ねて粘り強く合意形成を行う経験が大切です。

今の学校の姿は、数十年後の社会そのものであると言われます。学校がアップデートしていくことで、次の社会が変わると信じています。予測が困難な時代に「よりよく生きる」ためには、未来のために現在を学ぶことを大事にしなければならないと、強く感じているところです。